

研究ノート

ヤマトタケル伝承覚書

黒 沢 幸 三

を充分活用し、記紀の記事はどこまでが史実で、どの部分からは伝承又は物語であるかをはっきりさせる。本稿ではこのうち、持に(一)(二)の観点に立ちながらヤマトタケル伝承の概略を考察してみよう。

古代文学の研究を目ざしている者にとって、ヤマトタケルは一度はつきあたる課題であろう。「景行記」の旧辞のすべてを占めるタケルの征討伝承は一見したところ、大和朝廷の意図に沿い、しかるべき場所に記載されていると考えられる。だが仔細に検討してみると「天皇既に吾死ねと思ほすゆゑか……」云々にはじまるタケルの訴えは、古事記の中では異例である。東征に赴く途中、斎宮倭比売にこのようなことをつぶやくタケルの態度を天皇に対する反抗であるとは言えないとしても、胸中にやるか

たなき憤懣をいだいていることは認めねばならぬ。朝廷を中心に編纂された古事記に、何故にタケルは天皇の命令に必ずしも忠実ではない武人として語られているのであろうか。

このような疑問を持ちながら古代文学に親しんできた私はほぼ次のような観点のもとに古事記の考察を進めてきた。(一)系譜(帝紀)は説話の部分(旧辞)と有機的に結びついている。(二)大化前代の有力氏族は自家の伝承(氏族伝承)を持ち、それは記紀編纂の資料となった。(三)記紀以外の資料

まず、帝紀と旧辞を截然と分離し、旧辞の持つ文芸性をクローズアップさせようとしたのは和辻哲郎氏の「新稿日本古代文化」であり、爾来、氏の方法は多くの研究者に踏襲された。しかし、ヨーロッパの文芸論と氏独特のセンシビリティに依拠したこの立場には、事実を見究めようとする批判的精神、天皇制機構・氏族制・部の世界に生きた人間を追求するきびしさが稀薄で、多くは天皇に対する甘い讚美に終わる。当面のヤマトタケルについても、西征伝承と東征伝承の差異には触れず、倭比売に対するタケルの訴えを引用しながらも、その訴えが湧き出てきた根源に迫ろうとはしていない。それは氏の古事記に対する把

握の仕方が誤っているからである。そもそも旧辞は帝紀(系譜)の説話的表現と考えるべきで、根本においては、帝紀と旧辞はともに現在に生きてつながっている過去を説明したものである。ただその説明の仕方が、前者は羅列的・歴史的であり、後者は

触れ得なかった。思うに、このように性格を異にするタケルの物語を創造したのは一体誰なのであるか。この問いの解明には、タケル像の形象化にあたって、モデルがあったかなかったかを考えてみる必要がある。

格、兄の殺害、東西にわたる征討は雄略天皇に負っている。「雄略紀」によれば、大和朝廷は吉備・播磨・伊勢・葛城などに平定を進めているし、倭王武(雄略天皇)の上表文も「東西」「海北」の征討を告げている。しかし西征・東征の両伝承は同一時期に形成されたものでなく、朝廷の四方経略が西方よりなされたごとく、西征の物語こそタケル伝承の最初のものと考えべきである。そしてこの最初の物語においては、タケルは清朗勇武な少年武将として描かれていることを把握しておきたい。

説話的・文学的なのである。故に系譜と説話は別個のものではなく、ヤマトタケルの研究においても系譜を無視してはならない。

タケルのモデルをめぐる諸説を紹介すると、和辻氏は前掲書の第一頁に「日本武尊は全然現実の人物ではないであろう」とモデルを否定し、高木市之助氏(「吉野の鮎」)はモデルに天武天皇を考えている。

西征に続く東征の物語は筋も曲折し、歌謡も含まれ、内容が豊富になっているのでいろいろな考察が可能である。まず指摘すべきはタケルの遠征にあたって、伊勢神宮と尾張国造家が一つの拠点になっていることと、これは東征伝承の最初の形成が継体朝であることを示している。その理由を述べると、(一)史料がやや正確になっ

一方、私は「古代息長^{おきな}氏の系譜と伝承」

だが多くは雄略天皇をもってタケルのモデルとしている。これらに対する批判はさし

(「文学」昭和四十年十二月号)・「ヤマト

ルとして。これらに対する批判はさし

タケル伝承の基礎的考察」(「文学」昭和四

おいて私見を述べれば、タケル伝承の成立

十二年四月号)において、息長氏・ワニ氏

には段階があり、その形成期のモデルは雄

の氏族伝承を追求したが、狙いはヤマトタ

略天皇で、その完成期のモデルは忍坂日子

ケル研究の足場をかためるにあった。しか

人太子(敏達天皇の第一子、舒明天皇の

し、西征におけるタケルの雄々しい活躍、

父)であると思う。

東征におけるわびしい死という対立は、私

雄略天皇とタケルの類似はすでに説かれて

にも説明したい謎で、従って前稿ではタ

ているところで、名前の一致、勇武な性

ケルの東征物語を生みだした文学的基盤に

べると、(一)史料がやや正確になっ

「継体日記」に揃って伊勢齋宮（佐佐宜郎女）のことで、継体天皇と息長麻組郎女の娘）の記事のあること、(二)タケルと美夜受比売の物語は尾張氏の伝承に由来しているが（「熱田神宮縁起」参照）、この伝承の旧辞への定着は、継体朝以外には考えられないことなどがあげられる（継体天皇は尾張氏の娘目子郎女と婚して、安閑・宣化兩帝が生まれている）。しかもタケルが遠征した東国の下総国の戸籍には「刑部」（忍坂大中津比売の部民）・「藤原部」（藤原琴節郎女の部民）・「孔主部」（安康天皇の部民）などの記載があるが、これらは雄略天皇の母・伯母・兄に所属した名代・子代で、その設定の時期も雄略天皇の時代につながっている。このような背景から推察すれば、

はじめて東征伝承が形成されたのは継体朝で、ここにおいてもまた雄略天皇の人と事蹟が物語の形成に参与しているのである。

そしてさらに大事なことは、この継体朝に

できた東征物語はタケルと美夜受比売の唱和歌にも見られるように、希望や幸福をうちに含み持つ明るい遠征の話だったのである。第一期の西征伝承、第二期とも言うべき継体朝の東征伝承の両者には、現存の「景行記」に見られるような悲愁なる色合はなかったと思われる。

次は忍坂日子人太子とタケルの関係であるが、この説明には系譜を分析しながら、手のこんだ論証をしなければならぬ。

だが手短かに論断すれば、「景行記」の系譜において、タケルの位置すべき所に忍坂日子人太子のいることや、「姓氏録」にこのことを裏づける記述のあることなどから、兩人の関係が指摘されるが、なんと言っても太子として次期の天皇に予定されながら、天皇の座につけなかった宿命、しかしその子がやがて天皇に登極するといふ事情は全く同じである。ところが、雄略天皇の母が近江坂田郡を本貫とした息長氏の娘、忍坂大中津比売であり、同じく忍坂

の娘、忍坂大中津比売であり、同じく忍坂日子人太子の母が息長比呂比売であることは注目すべき事実である。つまりタケルのモデルである雄略天皇と忍坂日子人太子は息長氏を媒介として結びついているのであり、タケル伝承の制作に息長氏が関与していることはほぼ間違いないであろう。

「景行記」を見ると、西征と出雲征討とをすませたタケルは「頻しきて」東国征討へと追いたてられるが、これはタケルを邪魔ものにし、さらにはなきものにしたいという朝廷側の意向にもとづいている。タケルはこの重苦しい空気をおる程度察し、伊勢神宮にて己れの境遇を訴えるわけである。系譜によれば天皇に登極できる者はタケルを含めて三人であるが、ここにタケルは次期天皇候補の座からはずされたことになっている。おそらくそれを画策したのは他の皇太子を擁立している政治的有力者ということになる。だからもっとつきつめて言え

ば、この時タケルを取巻いた情勢は追放というよりは殺害という非情なものであったとも考えられる。タケルは文字どおり齋宮倭比売に泣いて訴えなければならなかったのである。しかしながら「景行記」は史実そのままの記録ではなく、創作された物語である。われわれはこの創作の根源を追求しなければならぬ。

現存の東征伝承を検討して誰もが気づくことは、物語の制作者と作中人物との一体感である。倭比売への訴え、死にぎはに弟橘比売が在りし日を回想して歌う歌。「あづまはや」と歎き呼ぶタケルの声。まして伊吹山で致命傷を受けてからのちのすべての場面において、不思議な位、制作者とタケルの呼吸は一致している。これは古代文学の中にあつては持筆すべきことで、タケルの物語が久しい間喧伝されてきたわけもここにある。すると物語の制作者とタケルの間には何か特別な関係があつたと考え

られる。そしてその関係が明白になれば、今までかなりまちまちであつたタケル伝承に対する文学的評価もはっきりしてくるのではなからうか。

さて、忍坂日子人太子について記す書紀の記事は断片的であるが、敏達天皇の第一子することは困難であるが、敏達天皇の第一子「用明紀」に「太子彦人皇子」とあるように、最も有力な天皇候補者であつた。そして息長氏をはじめとする守旧的氏族に擁立されていたのだが、反対勢力によって圧迫され、次期天皇の座を追われたわけである（敏達天皇→日子人太子→舒明天皇の血筋に蘇我氏が無関係であること。舒明天皇の和風諡号がオキナガタラシヒロヌカであることに注意したい）。反対勢力とは当時の政治的有力者馬子を中心とする蘇我氏一派である。ところが最近、山尾幸久氏が「大化改新序説」で、日子人太子が馬子一派によって殺害され、代つて崇峻天

皇、次に推古女帝が天皇の位についたということを発表した（「思想」四十三年七月号）。これは日子人太子をめぐる私の見解を歴史学の方から論証したことになる。つまりタケルが憤懣をいだいたのは馬子によって領導されていた推古女帝・聖徳太子の新体制で、タケルの悲話を制作したのは被圧迫者側の息長一派なのである。ここまで論じると、伝承の一期、二期においては凱旋將軍であつたタケルが、今見るような、孤独な遍歴の武將に変質されてしまった事情もわかつてくる。継体・欽明朝にまとめられたタケル伝承は、ある時期に改変の手が主として東征の部分に加えられたのである。そのことを簡単に述べてみよう。

「皇極紀」元年十二月の条によれば、舒明天皇の殯宮に際して息長山田公は「日嗣」を誅している。これは単純な記事だが意味するところは大きい。少し横道にそれるが、天武天皇の殯宮の場にて「日嗣」を

誅した当摩真人智徳は、同じく持統・文武両帝の死に際しても誅を奉っている。これらから類推すれば、同じように真人姓である息長氏はある時期に天皇家の系譜の管理に当たっていたと考えられる。しかも「日嗣」とは「皇祖等之騰極次第」(「持統紀」)のことで、「次第」の用字が示すように旧辞への発展を含んでいる。清朗なタケルの伝承を、暗い悲劇的な物語へと改変したのは山田公を中心とする息長氏一派である。われわれはここに文学史上はじめて、作者の血をかけた一人間造型を見得るのである。

一族の希望であった日子人太子を殺された息長氏は当然蘇我氏のきびしい監視のもとにあった。この圧迫に対する抵抗が実は息長氏をして、悲しく美しい征討物語を書かせたのである。彼等は物語の主人公の中に自分たちの運命を見つめ、白鳥になって空を行くタケルの魂に憧憬を感じたのであ

る。多くの記紀の物語がそうであるように、東征伝承も断片的説話や相互に無関係な歌謡の寄せ集めであるが、一つ一つは不思議なくらい、生きてつながっている。「山ごもれる倭しうるはし」や「平群の山の熊かし」の歌があたかもタケルの溜息であるかのごとくわれわれの胸にひびいてくる。それは単なる机上の創作ではなく、息長一族の現実から生みだされているからである。彼等は一人間像を虚構することによって、己に課せられた現実の問題を解こうとしているのである。

以上が、タケル伝承の概略である、しかし細部にはまだ多くの問題を残している。まず、タケルの出雲征討やタケルと美夜受比売のエピソードは独立に検討すべき課題である。次に、東征には地名起源説話がちこちにちりばめられている。この地名起源説話の意義についても考察されなければならぬ。また今日、ヤマトタケルの研究を

盛んにしたのは英雄時代論争があずかって力がある。私の考察した限りでのタケルは、ある氏族の族長でもないし、天皇に対して独立し、対抗している英雄でもない。即位前の雄略天皇や日子人太子に見られるように、次期天皇の予定者である。しかもタケルの東征伝承は四・五世紀の混沌たる時代にできたのではなく、大化改新の前夜にまとまったものである。このような時代の、このような作品を英雄時代と結びつけて考えることはできない。その他、なおいくつかの基本的事項もあるであろうが、ひとまず筆をおくこととしよう。